

Fukuoka University MEDICAL SCIENCE NEWS

No. 82

編集・発行
福岡大学医学会
福岡大学医学部内

福岡大学医学会ニュース

大学基準協会と 日本医学教育評価機構の 評価認定について

医学部長 小玉 正太



本年度、日本医学教育評価機構(JACME)より評価基準適合の認定がなされました。しかしながら、日本の医学教育の見直しや国際基準の策定に向けた動向が、本医学部で皆無であった訳では有りません。古くは、1994年当時の5代目医学部長であった、故 松岡名誉教授が既に英国医学協議会(GMC: General Medical Council)から訪問による外部評価を受け、福岡大学医学科の卒業生は2年間の卒後研修を受けた後、イギリスでの臨床研修を受けることが認められていました。その認定費用の維持が難しく失効したと知りました。既に当時この世相を予想されていたのかも知れませんが、残念ながら今はいくら確かめようも有りません。その後、歴代の学部長でJACMEの評価受審構想があったと聞き及んでいますが、具体的には2011年に11代目で前々学部長であった久保教授のときに、2023年以降、評価基準の適合がない大学出身者は国際認証を得ず、以後米国医師国家試験の受験資格を持たない旨の公知と、受審に向けた提案がはじめて医学部教授会でなされました。当時はその受審の意義さえ疑問視される意見があったことを記憶しますが、その構想・準備は前学部長でありました朔学長に引き継がれ、具体的な領域別分野の委員が編成されました。実際私もこのワーキング・グループに携わることに

よって、幸運にも受審に参加する機会に巡り合っています。

一方、独立評価では有りますが、大学基準協会の評価は専門医の階層構造に似ています。大学全体の教育評価は大学基準協会より医学部を含み評価されますが、医学部の不適切入試の問題もあり2020年度は保留の判定となっていました。ただ、真摯な改善に向けた取り組みや対応により、今回のJACME適合認定を受け大学基準協会の評価も承認されています。不適切入試問題に関しても、問題を抽出評価し改善策を行うことは、文部科学省の指針にも添い今回対応は貴重な経験となりました。次回評価時に繋げる対応が既に始まっていることを先生方もご理解下さい。

さて、JACMEの評価の意義や目指す医学教育の方向性については、高松先生が今後の課題と合わせ詳しく記載頂いています。加えて、この認定はこれで終了した訳ではなく、2027年に再審査を受ける準備が既に始まっています。その具体的な施策と対応については安元先生に記載頂きました。この評価受審をきっかけに、多くの先生方に改善すべき共学の方向性について参学頂きます様をお願いします。最後にJACMEの受審に当たりまして、ご尽力頂きました多くの先生方に感謝致します。

日本医学教育評価機構 (JACME) 医学教育分野別評価の認定と今後の課題

教務委員 高松 泰



国民に良質な医療を提供できる医師を養成することは、医学部にとって必須の命題です。欧米諸国では、自己点検および外部評価による医学教育プログラムの評価が10年以上前から実施されています。我が国においても、医学教育の質を国際的見地から保証することにより医学教育の充実・向上を

図ることを目的に、2015年より日本医学教育評価機構(JACME)による全国の大学の医学教育プログラムの評価(医学教育分野別評価)が始まりました。福岡大学は2018年6月に受審し、入学者選抜に関する調査のため審議が一時停止されていましたが、2020年10月に評価基準に適合していると認定されました。認定期間は2027年までの7年間で、最長の認定期間を得ることができました。

評価の概要を記します。学部への使命と卒業時の学修成果をFU-RIGHTとして定めていることを高く評価されました。教育プログラムに1年次から6年次までを通して卒業時学修成果を達成する段階と学修方略を表示していること、臨床実習にポートフォリオ評価を導入していること、担任制度や健康管理センターなど複数のカウンセリング制度により学生を支援していること、学生の自習スペースが確保されておりPC、Wi-Fi環境が整備されていること、総合大学として教育開発支援機構があり必要時に教育

専門家にアクセスできることなどが優れていると評価されました。

一方、今後は使命を果たすために適したアドミッションポリシー、学生の行動憲章や行動規範を策定することを求められました。教育プログラムに関しては、関連する科目を水平的統合、および基礎医学・行動科学・社会医学と臨床医学とを垂直的統合した教育カリキュラムを拡充し、臨床教育のためのシミュレーション教育の環境を整え、地域の医療施設と連携してプライマリケア、外来、予防医学、EBMを実践できる臨床実習を充実させる必要があります。また卒前と卒後の教育プログラムに一貫性をもたせること、グローバルな視野をもつべく国内外の交流を促進することが求められました。学生の評価に関して、科目試験の評価の信頼性と妥当性を確保するために外部評価を導入し、利益相反を生じないよう規約を整える必要性を指摘され、教員に関しては、FDへの参加率を高めてカリキュラムの理解を促すこと、新規教員採用にあたりその教員の役割とカリキュラムにおける責任を明示することを求められました。

今後は自己点検を繰り返し、指摘を受けた事項を改善していくとともに、国際基準に合致したさらに優れた医学教育を実践できるよう努めていきます。



福岡大学医学会第83回例会

■日時/令和3年2月17日(水) 18:00 ~ 19:10
■場所/医学部 RI 講義棟 3F 大講堂

【進行】集会幹事 平井 郁仁

- 1) 開会の辞 集会幹事 平井 郁仁
- 2) 会長挨拶 医学部長 小玉 正太
- 3) 新任講演 [講演 25分, 質疑応答 5分]

講演者… 升谷 耕介(腎臓・膠原病内科学 教授) 座長…小玉 正太
「腎代替療法における進歩」

4) 福岡大学医学紀要47巻優秀論文賞授与式

受賞者… 飯田 仁志(精神神経科) 打田 愛(腎臓・膠原病内科)
大串 祐馬(精神神経科)

医学生業績報告書「JAMeS」優秀賞授与式

* 大塚美玖、小猿幸希子、有吉恵奈、松田碧偉、永光松太郎
* 櫛田 薫、塚本愛麗子、嶺崎友亮、武藤 昂、志村 翼

5) 受賞論文の要旨講演 [講演 10分(質疑応答含む)]

① 講演者…飯田 仁志 座長…川寄 弘詔

「Relationship Between Changes in Cerebral Blood Flow and Neuropsychiatric Symptoms in Dementia with Lewy Bodies」

② 講演者…打田 愛 座長…升谷 耕介

「Calprotectin plays a Role as a DAMP for Development of Tubulointerstitial Injury Accompanied with MPO-ANCA-Associated Glomerulonephritis」

③ 講演者…大串 祐馬 座長…川寄 弘詔

「Alterations in Behavior and Brain Monoamine Levels of Olfactory Bulbectomized Rats Following Saiko-ka-ryukotsu-borei-to Administration」

6) 閉会の辞 集会幹事 平井 郁仁



講演された先生方を囲んで
(左から、升谷教授、大串先生、飯田先生、内田先生、
櫛田くん、小玉会長)



医学教育分野別評価の 2巡目受審に向けて

医学教育推進講座 安元 佐和

多くの皆様の御協力で2020年10月に日本医学教育評価機構（JACME）医学教育分野別評価の認証を受けましたことに心からお礼を申し上げます。

JACMEからの認証は、同時に世界医学教育連盟の国際基準に適合したことになります。2016年から準備を開始した自己点検評価報告書による書面調査と2018年6月に外部評価委員による実地調査を受審後の認証直前に、「福岡大学医学部不適切入試問題」が報じられ、審査は一時停止状態となりました。JACMEによるヒアリングと本学から「入試問題についての改善報告書」を提出し、実地調査から2年以上を経て2020年10月に7年間の認証を受けることができました。認証結果では、基本的水準の14項目、質的水準の10項目が部分的適合となり、今後は年次報告書の提出が求められます。全国的にはすでに2巡目のJACMEによる分野別評価の受審が始まっており、福大医学部は2027年までに2巡目の受審に向けた計画が必要です。社会的問題として取り上げられた入試に関しては早急な対応を行い、結果的に最初に改善が進んだ領域となりました。今後は、学修成果（FU-RIGHT）の見直し、カリキュラムの構成、学生評価の妥当性、信頼性の担保、IR機能、教育プログラム評価等のための各種委員会活動の実働などを改善する必要があります。教育カリキュラムでは、学修成果のマイルスト

ーン設定と評価方法、科目の垂直・水平統合、行動科学の明文化、学外での地域医療実習の必修化等があげられます。また、新型コロナウイルス感染禍で急遽導入になったオンライン授業については、対面講義中心から学生の主体的学習を推進する様々な授業形態への変換を図る良い機会となりました。今後は教職員、学生が一体となって教育プログラムの立案、実施、評価に参加する体制構築と相互理解が重要になります。

文部科学省の「医学教育モデル・コア・カリキュラム H28年版」は、5年ごとの見直しの時期となり、厚生労働省は、医学生の医行為を含めた診療参加型実習を推進するため、臨床実習前の共用試験（CBT・OSCE）の公的試験化を検討中です。また、2021年から福岡大学の卒業前Post-CC OSCEは、正式な共用試験としての実施を予定しています。

福岡大学の医学教育センターでは、2巡目の分野別評価受審までの継続した医学教育の改善および社会からの要請に応えるための新しい医学教育の情報を今後も提供してまいります。学生および医学部教職員の皆様には、卒前・卒後の一貫した医学教育へのご理解と御協力をよろしくお願い申し上げます。



祝 福岡大学医学紀要第47巻 優秀論文賞

(50音順)

飯田 仁志 (精神神経科)	「Relationship Between Changes in Cerebral Blood Flow and Neuropsychiatric Symptoms in Dementia with Lewy Bodies」
打田 愛 (腎臓・膠原病内科)	「Calprotectin plays a Role as a DAMP for Development of Tubulointerstitial Injury Accompanied with MPO-ANCA-Associated Glomerulonephritis」
大串 祐馬 (精神神経科)	「Alterations in Behavior and Brain Monoamine Levels of Olfactory Bulbectomized Rats Following Saiko-ka-ryukotsu-borei-to Administration」

祝 医学生業績報告書(Journal of Achievement for Medical Students; JAMeS)優秀賞

大塚美玖、小猿幸希子、有吉恵奈、松田碧偉、永光松太郎

Streptozotocin 投与による糖尿病モデルマウスの作製～経時的膵島組織像の変化について～ JAMeS 2(1): 49, 2019

櫛田 薫、塚本愛麗子、嶽崎友亮、武藤 昂、志村 翼

末梢血管拡張薬の局所投与スクリーニング系の確立

JAMeS 2(2): 38-42, 2019

新風

new phase

令和2年10月1日付で
本学へ赴任、昇格された方に
自己紹介をしていただきました。



腎臓・膠原病内科学
准教授

安野 哲彦

升 谷耕介教授のご推挙により、令和2年10月より福岡大学病院腎臓・膠原病内科准教授を拝命致しました。私は平成13年に福岡大学を卒業し、臨床研修を終了後に当時の第四内科に入局しました。大学院は斉藤喬雄教授の御指導により、急性腎不全をきたす先天性横紋筋融解症の研究に従事させて頂き、平成20年に学位を取得しました。その後、大学病院、済生会福岡総合病院にて診療させて頂きました。平成22年京都大学iPS細胞研究所にて、疾患特異的iPS細胞の樹立、腎臓の再生について研究しました。平成26年からは大学の助教として、スポーツ科学部との共同研究により、運動と腎血流の関係に関する研究に携わらせて頂いております。衛生・公衆衛生学教室の有馬久富教授にご指導頂きながら、平成29年より長崎県壱岐市での疫学研究(ISSA-CKD研究)、令和2年より腸内細菌の研究を行っています。上司の先生方に恵まれて、遺伝子、細胞培養、運動療法、疫学に関する研究に携わることができました。臨床では、在宅医療に興味があり在宅血液透析の導入に向けた取り組みを行っています。医療情報部の副部長を兼任しており、新診療棟の建設計画にも加わらせて頂きます。今後も臨床と研究を両立させ、微力ながら福岡大学医学部に貢献できるように努力します。

今後とも、ご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。



卒後臨床研修センター
准教授

北島 研

令 和2年10月に福岡大学病院卒後臨床研修センター准教授を拝命しました。副センター長として、センター長の総合診療部鍋島茂樹 副病院長の下、卒後臨床研修センター事務室と協働し、初期臨床研修医の指導やプログラム運営を行っています。令和2年度の福岡大学初期研修プログラムには1年次23名、2年次35名が在籍しており、1年次は必修科目を中心に、また2年次は必修の地域医療を含め研修医が入局検討中などの理由で自ら希望した診療科や関連施設での研修を行っています。令和2年度からは岩崎病院長のご高配により手当の増額を行い、他大学病院と遜色のない待遇となりました。しかし研修先を市中病院とする流れは続き、さらに福岡県の後期研修では医師供給過剰のためシーリングという採用数制限が課せられています。指導医が豊富な福岡大学病院の良さを活かした研修医指導を基本に、新設されたホームページでの広報、共通のスクラブ作成など今のコロナ禍だからこそできることを進めております。これからの日本の医療の宝である若い医師を育てるため、全力で努力する所存です。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



消化器外科学
講師

塩飽 洋生

こ の度、長谷川傑教授のご推挙により、消化器外科学の講師を拝命致しました塩飽洋生(しわく・ひろなり)と申します。2003年に福岡大学医学部を卒業後、福岡大学医学部第一外科に入局。その後、池田靖洋教授、山下裕一教授、長谷川傑教授をはじめ、諸先生方に、外科医として、また内視鏡医として温かく育て頂きました。学生の頃から内視鏡による低侵襲治療に大変興味があったため、2008年から2年間、内視鏡診断・治療の国際的な施設である昭和大学横浜市北部病院・消化器センターに国内留学をさせて頂きました。当初は、大腸の内視鏡診断・治療を学んで福岡に帰る予定でしたが、幸運にも同じ部署で行われていた食道アカシアに対する経口内視鏡的筋層切開術(POEM)の開発過程を間近で見ることができました。2010年に福岡大学に戻ってきた後、麻酔科の全面的なご支援のもと、当時は行っている施設が少なかった全身麻酔下での内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)に着手。その実績を元に2011年9月には、福岡県で第一例目となるPOEMを行うことができました。その後はPOEMガイドライン、国内初のPOEM多施設共同研究、先進医療から保険医療への申請作業などを通して、POEMの普及・標準化に、微力ではございますが、携わらせて頂きました。現在はそれらの経験をもとに、内視鏡的全層切除・縫合法の研究や、人工知能を用いた内視鏡診断法の開発に取り組んでおります。今後は、平井郁仁教授はじめ、消化器内科の諸先生方のご指導も頂きながら、科を越えて、福岡大学の内視鏡分野がより一層発展するよう、尽力していく所存です。皆様からの変わらぬご指導、ご鞭撻を宜しく願い申し上げます。



消化器外科
講師

梶原 正俊

長 谷川傑教授のご推挙により、令和2年10月付で福岡大学病院消化器外科講師を拝命いたしました。

大学時代そして外科医生活のほとんどを関西で過ごしてまいりましたが、この度、高校までを過ごした地元・福岡に戻り、令和2年2月より福岡大学病院消化器外科で肝胆膵外科診療に携わっております。「外科医生活の最後は地元で送りたい」という申し出を快諾いただいた大学の先輩でもある長谷川教授には大変感謝いたしております。

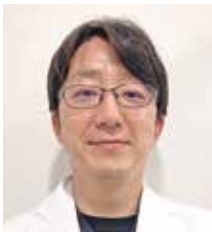
近年腹腔鏡手術の導入が肝胆膵外科領域にも広がり、化学療法の進歩も相まって、肝胆膵領域の診療は目まぐるしい変化を遂げ、「低侵襲手術+(術前)補助化学療法」が治療の主流になりつつあります。外科医をスタートした当初、拡大郭清の時代を生き抜いた指導医達から「big surgeon, big incision」と教えられた時代はたった20年前のことです。

今後も各方面にアンテナを張り、時代の流れに即した肝胆膵外科診療を心掛け、後進の育成にも尽力していきたいと思っております。ご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

産婦人科
講師

倉員 正光

このたび、宮本新吾主任共助のご推挙により福岡大学病院産婦人科講師を拝命いたしました。私は、平成17年に川崎医科大学を卒業し、卒後臨床研修医・後期研修医を経て、福岡大学医学部産婦人科教室に入局しました。入局後は、福岡大学病院、飯塚病院、IVF詠田クリニック、国立成育医療研究センターで、産婦人科とサブスペシャリティ領域として周産期・新生児医療を中心に臨床経験を重ねてきました。これまでに、日本産科婦人科学会専門医・指導医、日本超音波医学会専門医・指導医、日本周産期新生児学会周産期専門医(母体・胎児)、日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医を取得しました。また、宮本新吾主任教授のご指導のもとに、早産の疫学臨床研究におきまして、学位を取得させて頂きました。現在は、子宮内・羊水感染を中心に周産期関連の臨床研究を行い、日々の臨床現場の問題点を解決すべく診療に従事しています。また、医学部学生教育係として、臨床医学教育に注力しています。今後は、医学部学生・臨床研修医・後期研修医教育とさらに積極的に向き合い、福岡大学病院の今後の発展に鋭意努力していきます。

産婦人科
講師

宮田 康平

この度、宮本新吾教授のご推挙により、2010年10月1日付で福岡大学病院産婦人科講師を拝命いたしました。2006年に福岡大学を卒業し、臨床研修の後、福岡大学医学部産婦人科に入局しました。大学院進学後に宮本新吾教授ならびに医局のご厚誼により、2010年より国立成育医療研究センター研究所システム発生・再生医学研究部の浅原弘嗣先生、高田修治先生の元に国内留学を、2015年より米国サンディエゴのScripps研究所に海外留学をさせて頂いた

きました。2つの機関での研究生活で領域にとらわれない多様な研究を通じて、研究スタッフと一丸となって科学的難題に取り掛かるおもしろさを学びました。帰国後は、自由気ままに基礎研究をしていた私の復職を快くご許可いただき現職に至ります。当科では産科部門を挙げて細菌感染に起因する早産の基礎および臨床研究を行っています。私自身は細菌叢・ヒト間のシグナル伝達についての研究に携わり、加えてこれまで疎かにしておりました臨床の面でもお役に立てましたら幸いです。身の丈に合わない役を仰せつかり、甚だ恐縮ではございますが、今後も皆様の御指導御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

消化器外科
講師

山田 哲平

長谷川 傑教授のご推挙により、2020年10月1日付で福岡大学病院消化器外科講師を拝命致しました。

福岡市で生まれ育ち、2004年に福岡大学医学部を卒業後に胸部腹部悪性疾患に対する鏡視下手術と移植免疫に興味を持ち、福岡大学医学部第二外科に入局致しました。その後、2008年から市中病院にて消化器内視鏡手技から一般・消化器外科手術の研磨を行い各種専門医を取得致しました。外科臨床を経験するにつれがん免疫に興味を抱くようになり、2012年から久留米大学医学部免疫・免疫治療学講座に国内留学し、がん免疫の基礎研究や多くのがん免疫療法の臨床試験を経験致しました。福岡大学消化器外科へ帰学後の2015年に同研究で医学博士を取得し、さらなる試練に挑戦するため2016年から米国ハーバード大学医学部マサチューセッツ総合病院(MGH)外科にリサーチフェローとして留学し、新規がん免疫療法の開発研究を行いました。2018年から福岡大学医学部再生・移植医学講座へ帰学させて頂き、2019年から現在の消化器外科へ在籍させて頂いております。

引き続き、当講座 長谷川 傑教授のご指導のもと、消化器癌に対する集学的治療を診療の柱とし、同臨床研究や医学生、若手医師教育に持てる力を全て注いで参りたいと考えております。また、わたくしのライフワークとしますがん免疫研究におきましては、再生・移植医学講座 小玉正太教授のご指導も賜りながら1歩1歩確実に前進させたい所存でございます。今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い致します。

第47回 医学部慰霊祭



第四十七回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、本学教職員と学生代表が参列し、令和二年十月十七日(土)午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。新型コロナウイルス感染症感染予防の観点から、ご遺族並びにご来賓の方々にご列席いただくことができなかったことは誠に残念でございます。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、系統解剖のために献体された二十五柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた十三柱、合わせて三十八柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、小玉正太医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに『私どもは、日々花を供え、香をたいて三十八柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、皆様方の崇高な御遺志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することをお誓い致します』と新たな誓いを披瀝しました。



福岡大学医学部生理学講座は、昭和47年の医学部創設と同時に開講され、発展を遂げてまいりました。

研究につきましては、伝統的に心筋細胞などにおける興奮収縮連関のメカニズムの解明を中心としたプロジェクトを展開し、電気生理学や分子生物学、数理生物学的手法なども用いて、循環器系をはじめ様々な分野の発展に寄与する報告を続けています。研究テーマは、

- ・リアノジン受容体やTRPチャネルなど細胞内のイオン動態を制御する分子の、循環器疾患発症における役割の解明
- ・腸上皮細胞の水分の分泌や、生体内の機械的刺激への応答におけるイオンチャネルの役割についての研究
- ・cGMP、cAMPなど、様々な細胞において重要な役割を果たすセカンドメッセンジャーの作用メカニズムの解明
- ・超音波や電磁波など、物理的な手法を用いた、新しいがん治療法の開発

など多岐にわたっています。

教育につきましても、教室員全員で取り組んでいます。今年度は遠隔講義となることも多く、直接学生と触れ合う機会が限られてしまいましたが、学生に興味を持っていただきつつ効率的に生理学の知識を習得していただけるように心がけています。また知識だけにとどまらず、講義や実習を通して、コミュニケーションやリサーチマインドなど、臨床医学の基盤ともなる、重要な要素の習得も促していきたいと考えています。研究室配属実習などではWebexなどのオンラインコミュニケーションツールも利用して、プレゼンテーショ

ン能力の向上や、研究の重要性・魅力の理解を深めることも大切にしています。

令和2年4月1日付で藤田が講座の主任教授を拝命いたしましてから、まもなく1年になります。福岡大学の皆様からは、これまで様々な面で多大なるサポートをいただきました。深く感謝申し上げます。

教室員それぞれが得意とする能力を発揮し、協力しあって、研究・教育を高めていくことをつねに目指しています。また生理学の研究・教育を、臨床医学の発展につなげていきたいと考えております。基礎研究の一分野として、臨床講座を含め、他の講座の方々のお役に立てましたらと思います。私共が貢献できることがございましたら、いつでもお声かけいただければうれしく思います。教室員一丸となって精励してまいります。引き続きご指導ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



学位取得

次の方は、福岡大学より博士（医学）を授与されました。

課程修了による
学位取得者
[令和2年9月13日]

- ・榎本 年孝(病態構造系専攻)
- ・星野 耕大(病態機能系専攻)
- ・十時 崇彰(病態機能系専攻)
- ・川村 朋子(病態構造系専攻)
- ・小松 志保(先端医療科学系専攻)
- ・重岡 徹(先端医療科学系専攻)

論文提出による
学位取得者
[令和2年10月1日]

- ・小谷 尚也(リハビリテーション部 理学療法士)
- ・松本 慎二(病理部 臨床検査技師)
- ・武村 有祐(筑紫病院脳神経外科 助教)
- ・湧田 尚樹(救命救急センター 助教)
- ・岡村 寛能(眼科 助教)
- ・伊東 絵美(放射線科 助教)
- ・伊藤 宏太郎(伊藤皮膚科)
- ・藤原 裕矢(牟田病院)
- ・杉本 薫(内分泌・糖尿病内科 助手)
- ・猪俣 慎二郎(夫婦石病院)



この度は福岡大学医学会ニュースにおいて教室紹介の機会を与えて頂き、ありがとうございます。教育と診療に関する当科の取り組みについて述べたいと存じます。

1. 臨床での実践を意識した医学教育を行っています

福岡大学医学部消化器内科講座は、医学部では消化器病学の講義、臨床修練入門の診断学実習、各学年における臨床実習などの学生教育を担当しております。消化器領域は形態の変化を視覚的に捉えることが重要ですので、講義には写真や図を多用し、項目別にわかりやすく作成したオリジナルのテキストを使用しています。実習では、画像診断の読影や内視鏡を用いた治療などの実地医療に触れる機会を増やし、学生が興味を持って学習できるように配慮しています。新型コロナウイルス感染防止の観点から患者さんを直接診察することは難しいですが、症例を担当してもらい、問題発見解決型の学習を心がけています。実践に即した学生教育を行うことで、学生が医師としての責任を自覚し、自らの将来像が描けるようになればと思っています。

臨床研修医には消化器内科の診療はもちろんですが、内科医として患者さんをトータルに診ることを教育しているつもりです。福岡大学で研修する医師には、どこで研修するより臨床能力に長け、実践に強い医師に成長して欲しいと思います。

2. あたたかく、そして信頼される医療を提供していきます。

病院の診療では、消化管、肝臓、胆膵の3領域の内科診療を統合的に行っています。消化管領域は、消化管出血への緊急処置、癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)など低侵襲の内視鏡治療、炎症性腸疾患(IBD)に対する分子標的薬などの先端医療を提供しています。肝臓疾患では肝炎ウイルスの治療が飛躍的に向上しており、完治を目指して治療を行っています。一方、肝癌治療や最近その原因として注目されている非アルコール性脂肪肝など新たな課題にも取り組んでいます。高齢化社会で胆膵疾患は増加の一途を辿っています。当科では2020年4月から胆膵内科を開設し、内視鏡

的逆行性胆管膵管造影(ERCP)に関連した検査や治療を行っています。連携施設にも周知され地域医療にも貢献しています。各領域にはそれぞれ優れたエキスパートが在籍していますが、専門領域のみを担当しているわけではありません。個々の医局員が消化器病学全体を学び、実践することが当科の強みかと思います。また、消化器外科を含めた他の診療科や多職種とのチーム医療も重要と考えています。癌治療については消化器外科や病理部とESD症例のカンファレンスを行い、確実な癌の切除を安全に行い、組織学的に正しく評価するように努めています。IBDに関しては看護部、栄養部、薬剤部、ソーシャルワーカーなどが参加する多職種カンファレンスを定期的に行っています。若年性者が多いIBDの診療は、単に身体的な訴えを解決するだけでは十分ではなく、生活環境やライフイベントにも配慮が必要で、課題解決のためには円滑なチーム医療の実践が重要です。現在の多職種カンファレンスでの試みをさらに飛躍させるために、2021年4月には福岡大学病院に炎症性腸疾患先進治療センターが開設される予定になっています。これまで以上にIBD患者のトータルケアを充実させていきたいと思っています。

われわれ消化器内科は、教室員全ての力を結集し患者さんを中心とした“あたたかい医療”を高いレベルで提供していきたいと考えています。福岡大学病院の他の診療科の医師やメディカルスタッフはもちろんですが、地域住民や関連医療機関の先生方に頼りにされるような診療科、医局を目指し、努力していく所存ですので、今後ご支援・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



消化器内科病棟新人Ns(+α)と医局の新人とともに

教室だより
Letter from a classroom



腎泌尿器外科学

腎泌尿器外科学講座は、1973年4月に泌尿器科学教室として開講し、2019年には腎泌尿器外科学講座として名称を変更しました。初代教授が坂本公孝先生、2代目が有吉朝美先生、3代目が田中正利先生で、4代目に羽賀宣博が2020年4月より教室を主宰させて頂いています。いまだ教室の土台作りという段階で、胸を張ってご報告できる状況ではないかもしれませんが、現況をご報告いたします。

診療に関しましては、患者さんの利便性を第一に考え、外来診療枠の増加を行いました。また、手術の待期期間の短縮のために、これまでロボット手術の枠を1日1件であったものを1日2件に増加いたしました。さらに、私の専門としていたロボット支援手術の新規技術である「ロボット支援腎盂形成術」を2020年9月から開始しました。腎移植に関してはCOVID-19が猛威を振るっておりますが、感染対策を十分行い、本年度は2021年1月の時点で既に4例実施し、いずれも良好な経過をたどっております。また、腎移植ドナーに対しては、QOLの向上と低侵襲化を目指し、用手補助を用いない腹腔鏡下ドナー腎採取術を開始いたしました。

研究に関しましては、新型コロナウイルス感染拡大に伴う非常事態宣言下において、排尿機能や排尿症状の変化に関する検討を行っております。また、ロボット手術のさらなる低侵襲を目指し、安全な手術体位の開発を行っております。基礎研究においては、これまで私が行っていた前立腺肥大症の発症メカニズムの解明に取り組んでおります。

教育に関しましては、当講座が最も力を入れています。若手医師に対しては、羽賀の指導の下、積極的に手術の執刀機会をあたえ、安全確実な手術治療を行っており

ます。研究面に関しては、研究の立案、論文の書き方、学会プレゼンテーションの方法等、時間の許す限り若手医師とdiscussionし、少しずつではありますが成果を実感しています。学生教育に関しても、教室員一同、力を合わせて行っています。特にstudent doctorに関しては、実習中は一人の医師として患者さんの治療に関わるようにしてもらっています。知識が不十分なところは、時折質問を交えるようにしながら、泌尿器科学の知識の習得と、また一人でも多くの学生に泌尿器科学に興味を持ってもらえるようにしています。

人事面に関しては、長期間にわたり福岡大学で勤務されていた入江慎一郎先生（17回卒）が本年度で退職され、関連病院の1つである飯塚病院に着任されます。医局長も長く勤められ、講座としては大変な痛手ではありますが、福岡大学医学部 腎泌尿器外科学講座グループの一員として、講座を盛り上げていって頂きたいと思います。

末筆になりますが、福岡大学医学会会員の皆様におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



モーニングカンファレンスにて：マスクを着用のままでの撮影となってしまいました。

長い間ありがとう
ございました

令和2年10月1日～令和3年2月28日までに退職された方

■ 福田 健治 講師（脳神経外科）

以上、1月31日付け